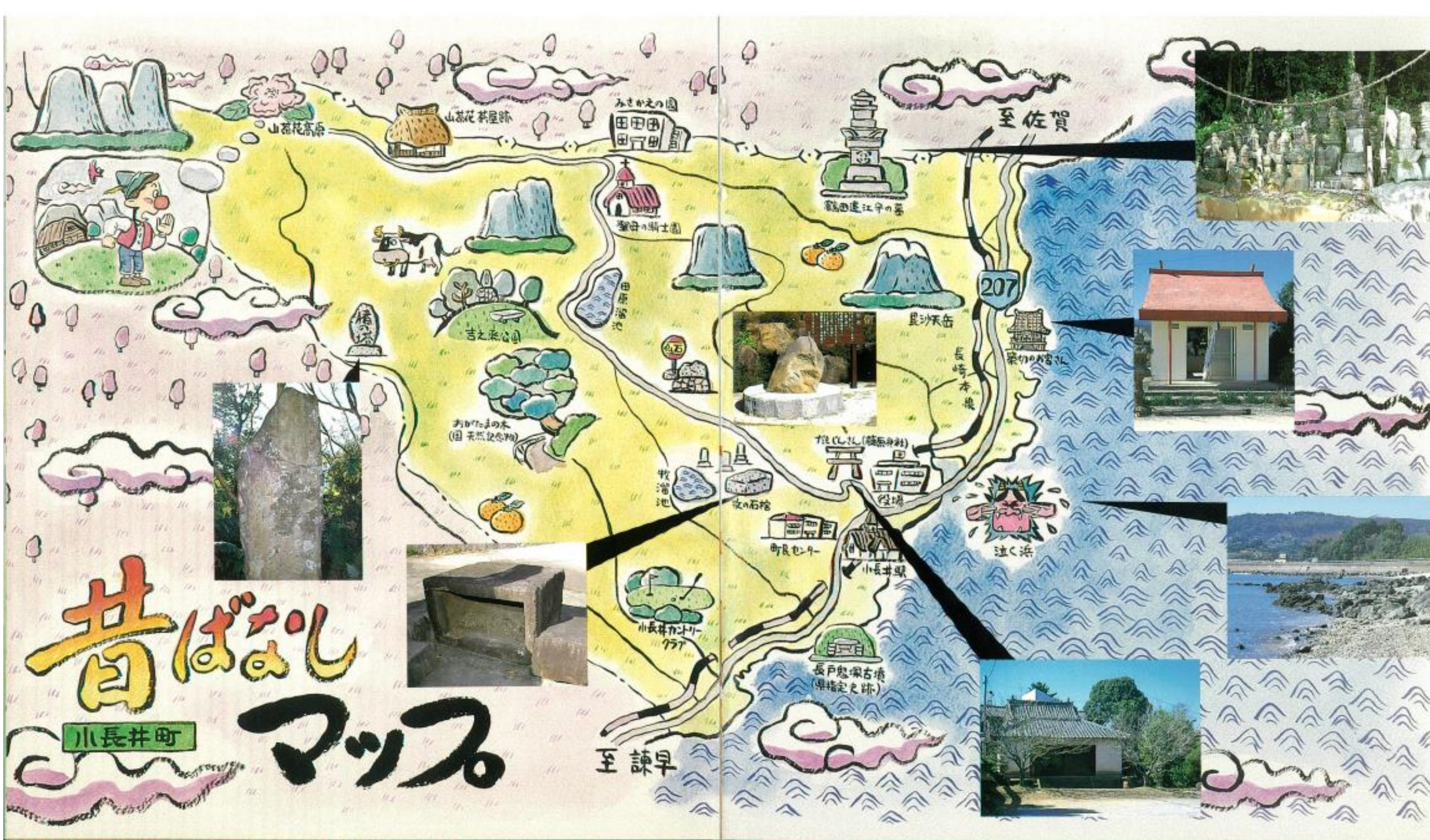


こながいの 昔ばなし

こながいの昔ばなし





こながいの 昔ばなし

もくじ

○ゴマと殿様とのさまとおだけ(遠竹)

1
[Go](#)

○観音さんかんのん(築切つっきり)

9
[Go](#)

○泣く浜なま(井崎いざき)

15
[Go](#)

○仏ほとけ 石いし(田原たばる)

23
[Go](#)

○神かんまち神かんなごり(小川原浦おがわはらうら)

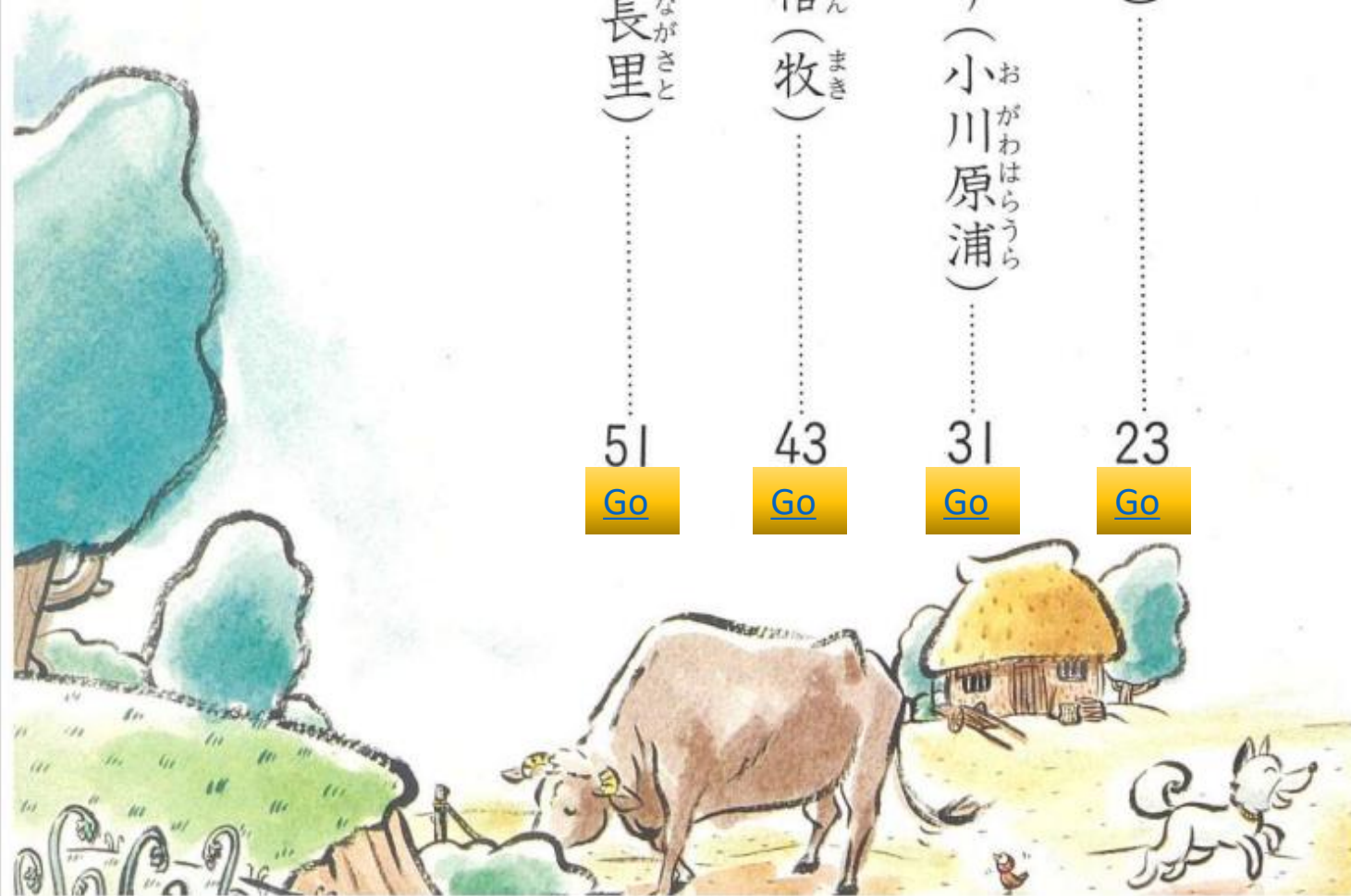
31
[Go](#)

○杓もくどんと石いしの棺かん(牧まき)

43
[Go](#)

○重太夫じゅうだゆうと天狗てんぐ(長里ながさと)

51
[Go](#)

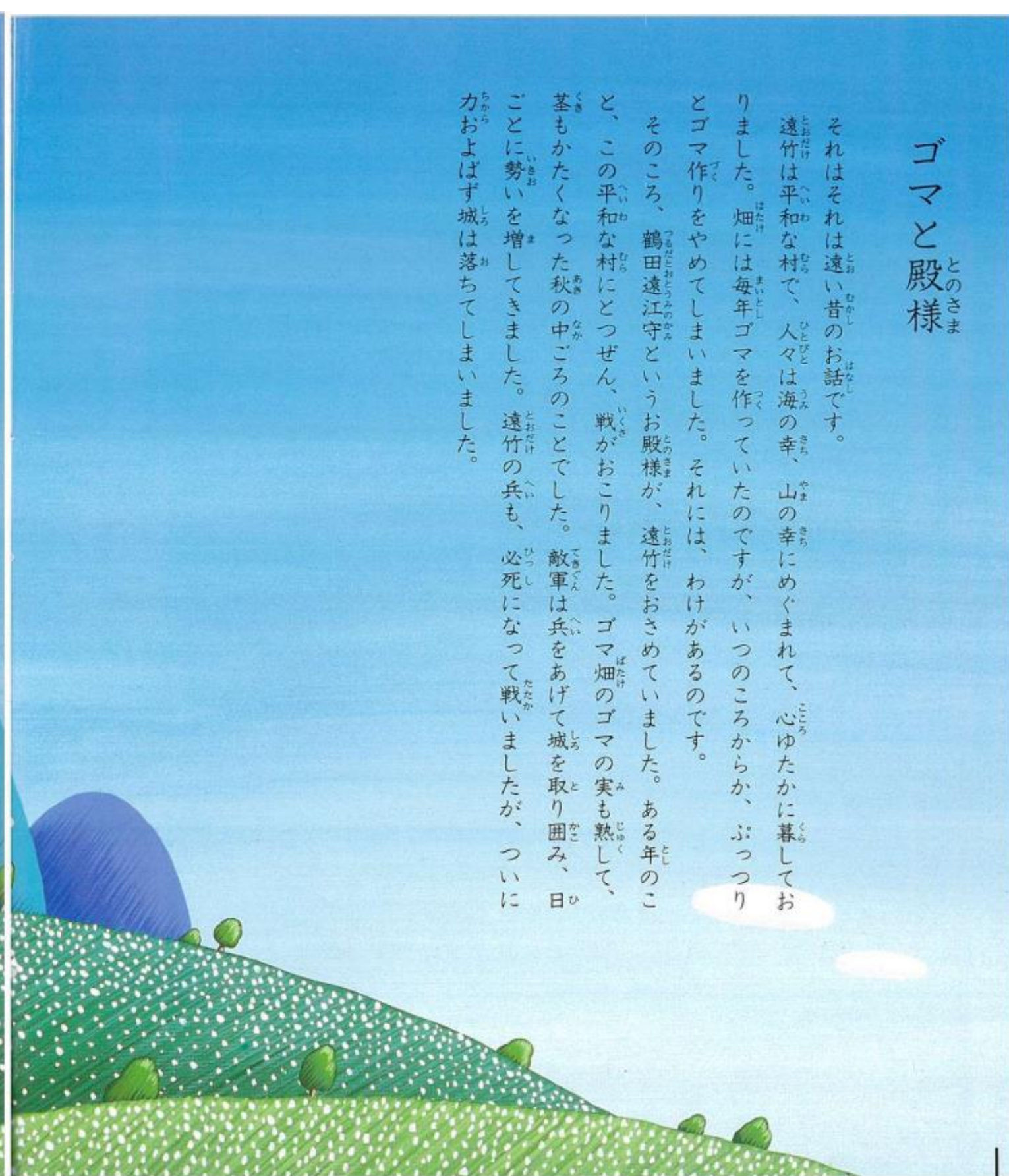
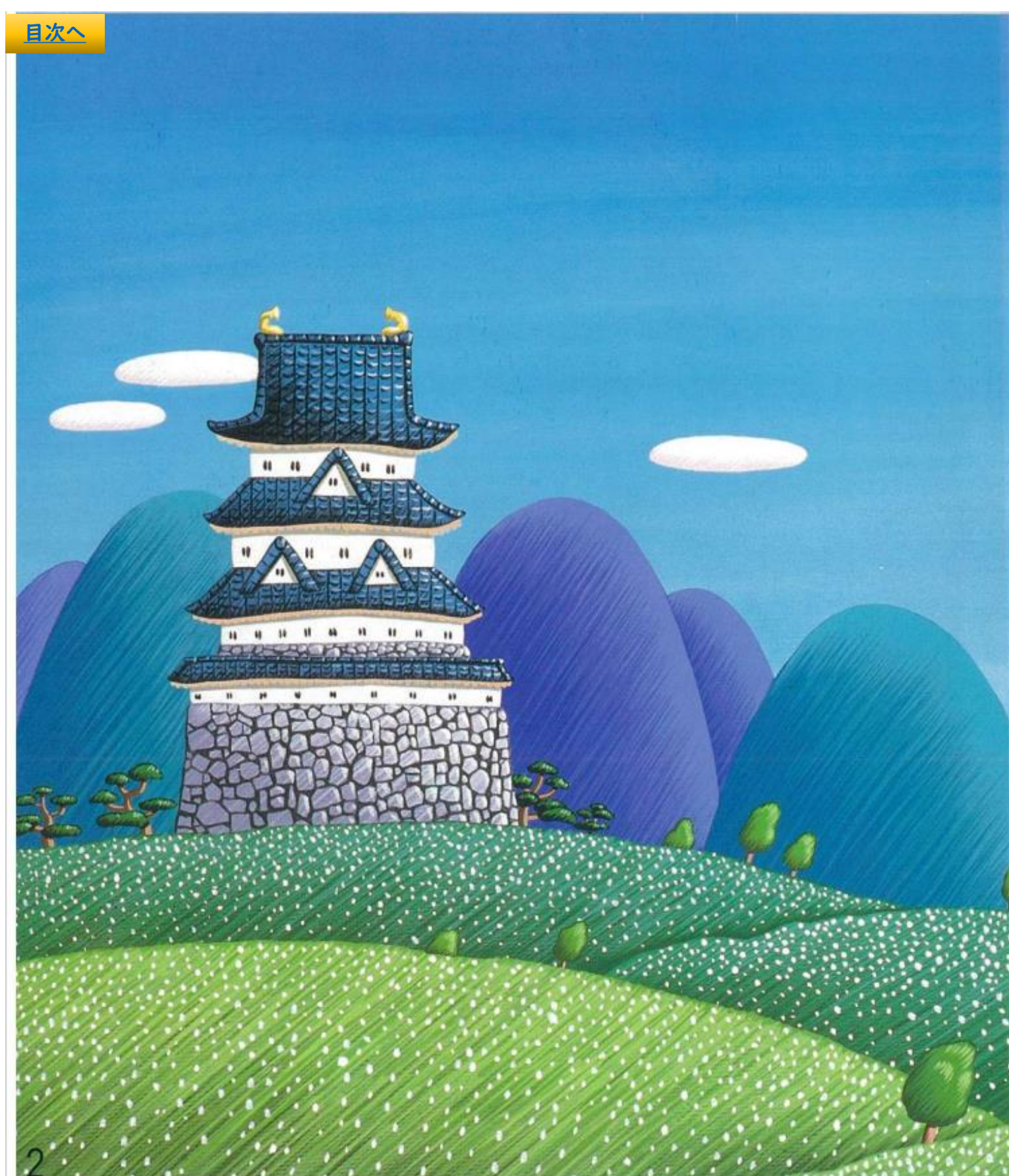


ゴマと殿様とのさま

それはそれは遠い昔のお話です。

遠竹は平和な村で、人々は海の幸、山の幸にめぐまれて、心ゆたかに暮しておりました。畑には毎年ゴマを作っていたのですが、いつのころからか、ぶつたりとゴマ作りをやめてしまいました。それには、わけがあるのです。

そのころ、鶴田遠江守というお殿様が、遠竹をおさめていました。ある年のこと、この平和な村にとつぜん、戦がおこりました。ゴマ畑のゴマの実も熟して、茎もかたくなった秋の中ごろのことでした。敵軍は兵をあげて城を取り囲み、日ごとに勢いを増してきました。遠竹の兵も、必死になって戦いましたが、ついにかおよばず城は落ちてしまいました。





どうか敵の目をのがれたお殿様は、刈り取り時期が近づいたゴマ畑へ逃げこ
 みましたが、追っ手はすぐそばまで近づいてきました。そこで、お殿様は身を
 くすために、ゴマ畑の中へしゃがみこみました。そのとたんに、「グサッ。」と、
 片方の目をゴマで突いてしまいました。一瞬ひるんだお殿様を、敵が見のがすは
 ずはありません。ついにとらわれの身となったお殿様は、たいそうくやしがり、
 「このあと遠竹では、けっしてゴマを作ってはならぬ。」と言い残し、遠竹城のつ
 ゆと消えました。

それ以来、この地では、「お殿様が命をおとされたのはゴマのせいだ」と言っ
 て、ゴマ作りをやめてしまいました。



それから、なん年かたちました。

ある日、「そがん言い伝えは迷信たい！」と、一人の男が言い張って、ゴマを畑に作りました。ゴマはやがて白い花を咲かせ、秋になるとたくさんの実をつけました。

「やっぱ迷信やっただたい。」と、男は得意そうに笑っていました。ところが、その秋にとれた米を俵につめて、縄でしばろうとしたときのことです。どういうわけか、俵の中にかまがまぎれこんでいて、そのままで足をザツクリと切ってしまいました。それを見た村人たちは、「ほらみろ、ゴマどん作っけんバチのあたったとたい。」と、あちこちで、言いあいました。



※1・そがん↓そんな
※2・……たい↓……だ
※3・やっぱい↓やっぱり

※4・やっただたい↓だつた



それから月日が流れて、ゴマの話も忘れられたころ、遠竹のある家に、隣の村からお嫁さんがやって来ました。そのお嫁さんは、たいへんな働き者で、朝から晩までこまめに動きまわっていました。ある日、実家から持って来たゴマの種を、なにげなく畑にまいてしまいました。秋になり、たくさんの実をつけたゴマを見て、お嫁さんはたいそう喜びました。でも、ふしぎなことにゴマを刈り取った次の日から、お嫁さんの片方の目は、なにも見えなくなっていました。

遠竹では、今でも「ゴマを作ると、その家には何かしら不幸な事が起こる。」と、言い伝えられています。

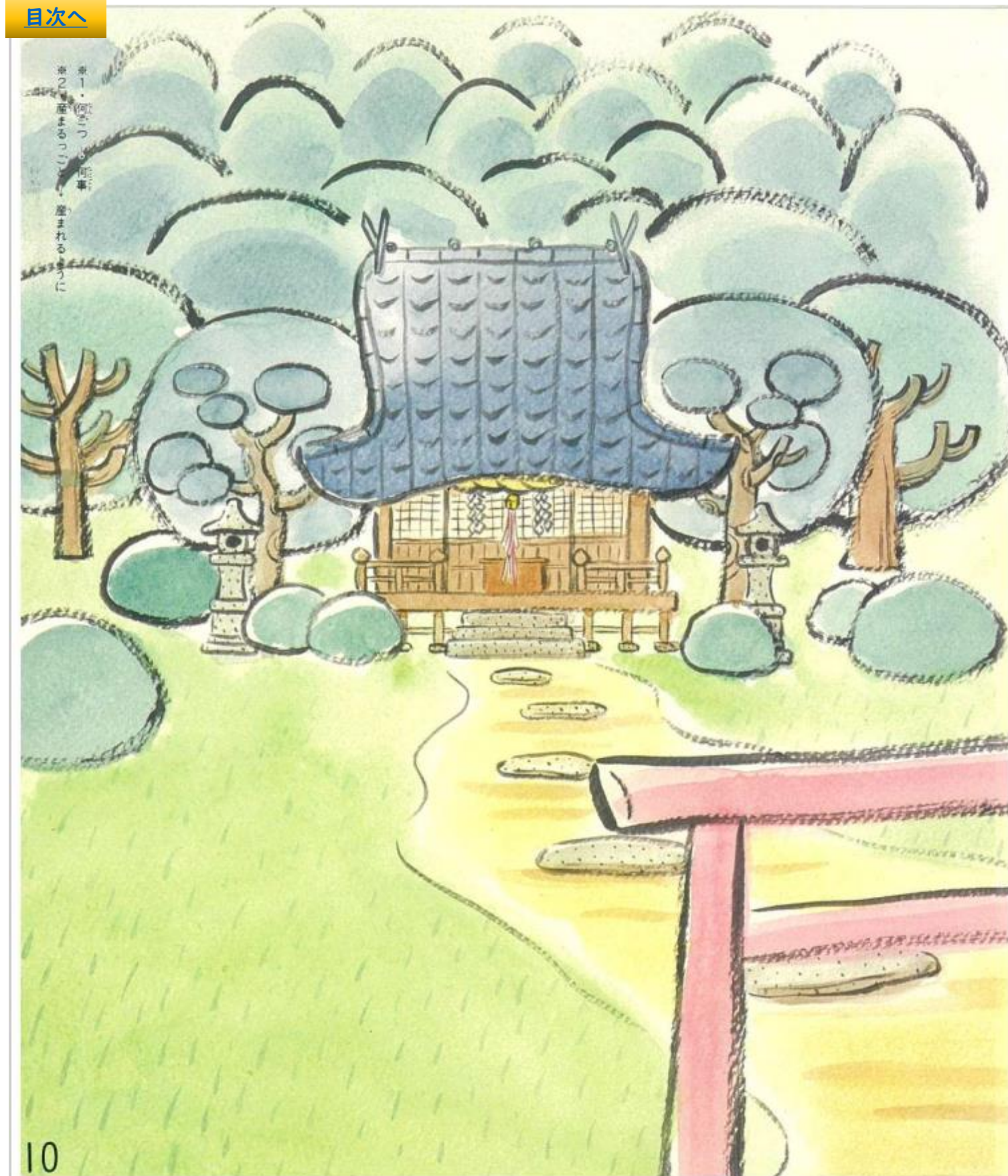


観音さん

昔むかしのお話です。

こんもりと茂った森の中に、観音様がまつてありました。めでたいことや、心配ごとがあると、村人達はまつ先に観音様に、お参りすることにしていました。ある年の稲の刈り取りが近づいたころのことでした。お嫁に行った娘さんが、お産のために村へ戻って来たのです。迎えた家では、もう大喜び……。皆んなで赤ちゃんの誕生を、今か今かと心待ちにしていました。

でも、予定よりひと月も早く、赤ちゃんが産まれそうになりました。心配した家の人達は、観音様へと急ぎました。「観音さん、何ごつもなく、赤ちゃんの産まるつごとのんます。」と、一生けん命にお願いしました。



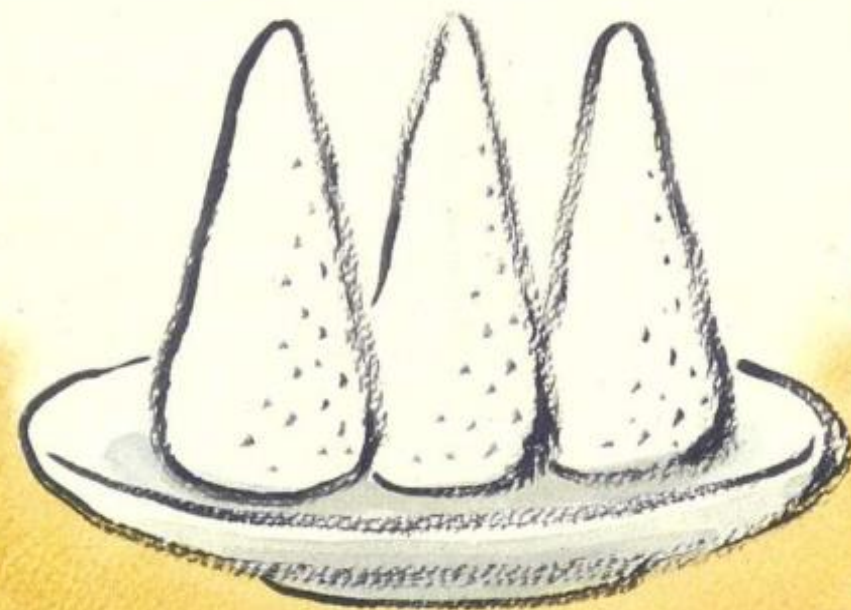
その願いを、観音様が聞きとどけてくださったのでしよう。赤ちゃんは、無事に産まれて来ました。

両手に、ちよこんどのるくらいちいの小さな赤ちゃんでしたが、それはそれは、とてもかわいい女の子でした。女の子は、お母さんのおっぱいを飲んで、どんどん大きくなりました。

お母さんも、家の人達も皆んな、観音様のおかげだと、ありがたく思いました。ある朝、一家総出で、新米を炊いて、観音様へお礼参りに行くことにしました。ほっかほかのご飯を、小人の帽子ぼうしのようなかたちに、にぎって持って行きました。また、白い布に、女の子の名前を大きく書いたのを持って行き、それを観音堂の鈴の下へ、しっかりと結びつけました。そして、

「こいこいも、病気せんごつ、見とつてくんさい。」とお願ひしました。





そのかいあって、女の子はスクスクと成長し、とても美しい娘になりました。
それからずっとこの村では、赤ちゃんが産まれるころになると、無事に産ま
れるようにと願をかけ、かなえられるとお礼にご飯をあげ、名前を書いた白い布を、
鈴の下に結びつけるようになりました。

その習慣は今でも続いています。毎年、八月二十一日には観音堂の広場は、千
灯籠祭りでにぎわいます。

泣く浜

昔むかし、そのまた昔、小長井町が、井崎、小川原浦、長里の三つの村に分れていたころよりも、もっと昔のことでした。

人々は、多良岳の山すそで稲を作ったり、牛やにわとりを飼ったりして、仲よく暮らしていました。

そのころ多良岳には、たいそう大きな鬼が住んでいて、山から里へとおりて来て、村人たちが大切にしている田畑を荒したり、牛やにわとりをぬすんだりして、人々を困らせていました。



村人たちは、何とかしてもらおうと、多良岳の神様をお願いに行きました。鬼の悪さを聞いた神様は、カンカンに怒って、多良岳から追いはらってしまおうと考えました。神様は、鬼を呼びつけると、「おまえのせいで、村人たちは大変な目にあっている。許すわけにはいかん。今すぐこの山を、出て行け!」と言いました。鬼は、追い出されては困ると思い、一生けん命にあやまりました。

そこで神様は、「どうしても、この山にいたいのなら、今夜、井崎の浜から大石を運びそれで鳥居を作れ。ただし、一番どりが鳴く前に作りあげることができなければ、とつと出て行くんだぞ。」と告げました。



いくら鬼でも、井崎の浜の大石を、ひと晩で運びあげてしまうことなど、どういできるわけがないと、神様は思っていました。ところが鬼の力はすごいもので、自分のからだほどもある大石を、次々と山へ担ぎ上げました。

そろそろ、夜が明けようとするころには、最後の石を担ぎ上げるばかりになりました。

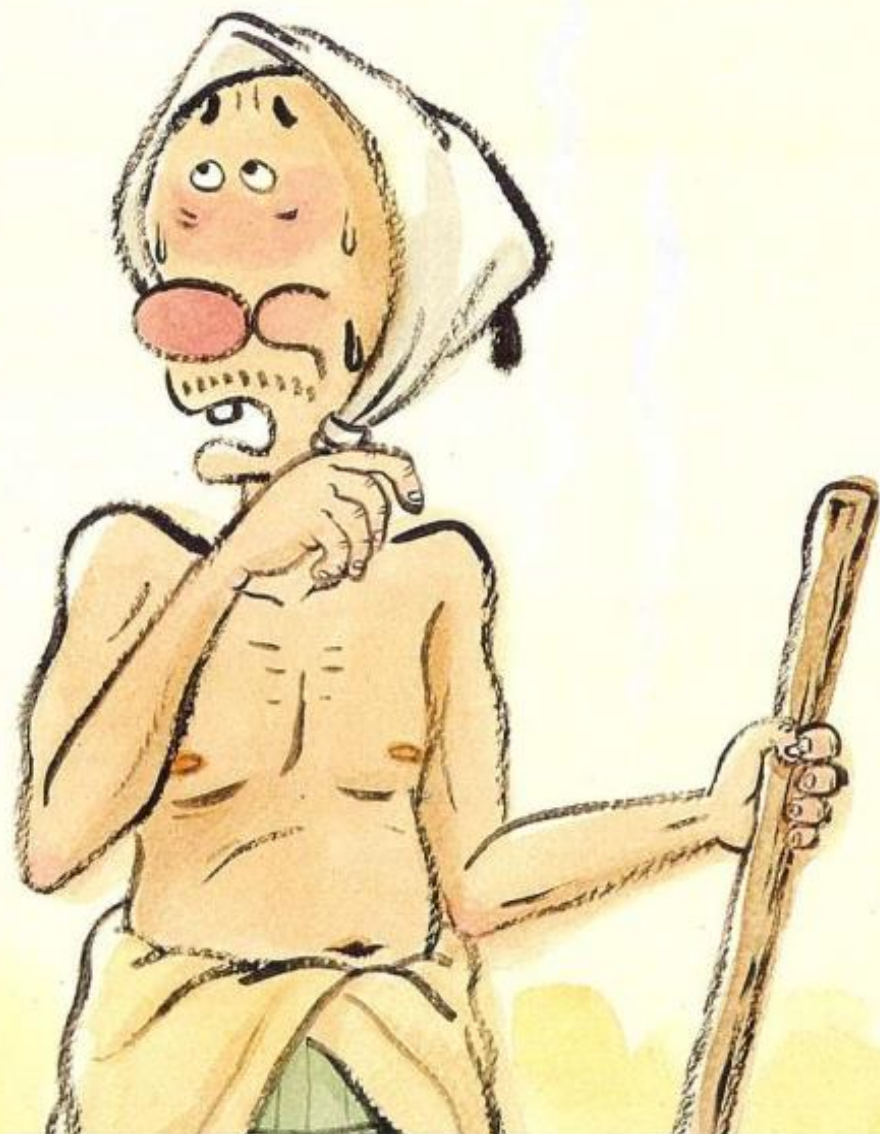
もうすぐ出来上がると思うと鬼は、喜びいさんで、今まで運んだ石よりも、もっと大きな石を担いで、一生けん命に山道を登って行きました。



それを見ていた神様は、「これはいかん。」と思われたのでしょう。
 まだ夜が明けていませんでしたが、にわたりのまねをして、「コケコ
 ツコー。」と鳴きました。それに合わせて、黒仁田あたりのにわとり
 も一斉に鳴き出して、時を告げました。
 鬼は、夜が明けたのとかんちがいして、たいそう悔しがり、井崎
 の浜におりてきて、「オーン、オーン。」と大きな声で泣きました。
 鬼の怪力も神様の知恵には、及ばなかったのです。
 そのあと、鬼が大泣きに泣いた井崎の浜は、鬼の泣いた浜へ泣く
 浜と呼ばれるようになりました。耳をすますと今でも、鬼の泣き
 声が聞こえてくるそうです。

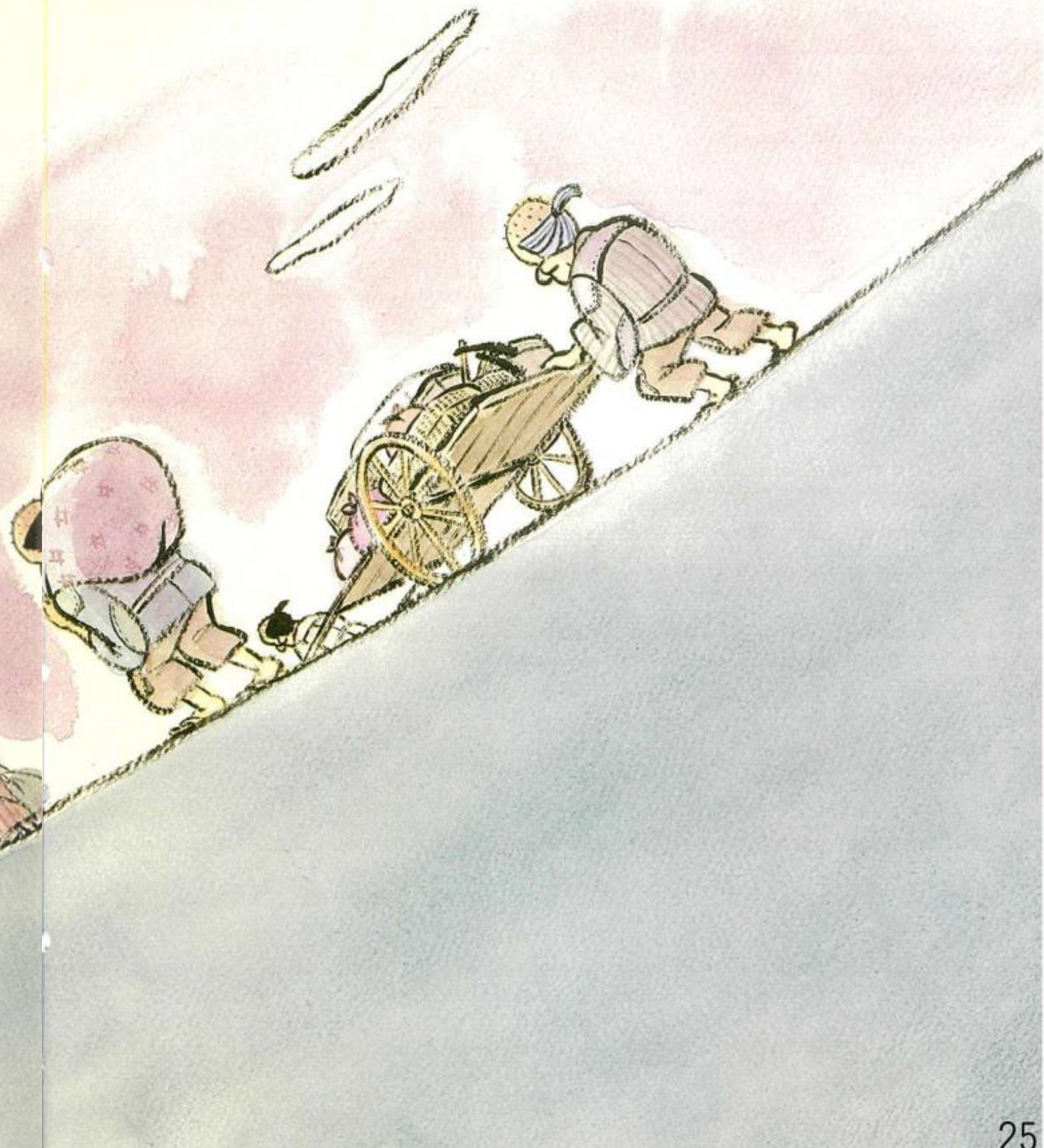


ほとけ
石いし

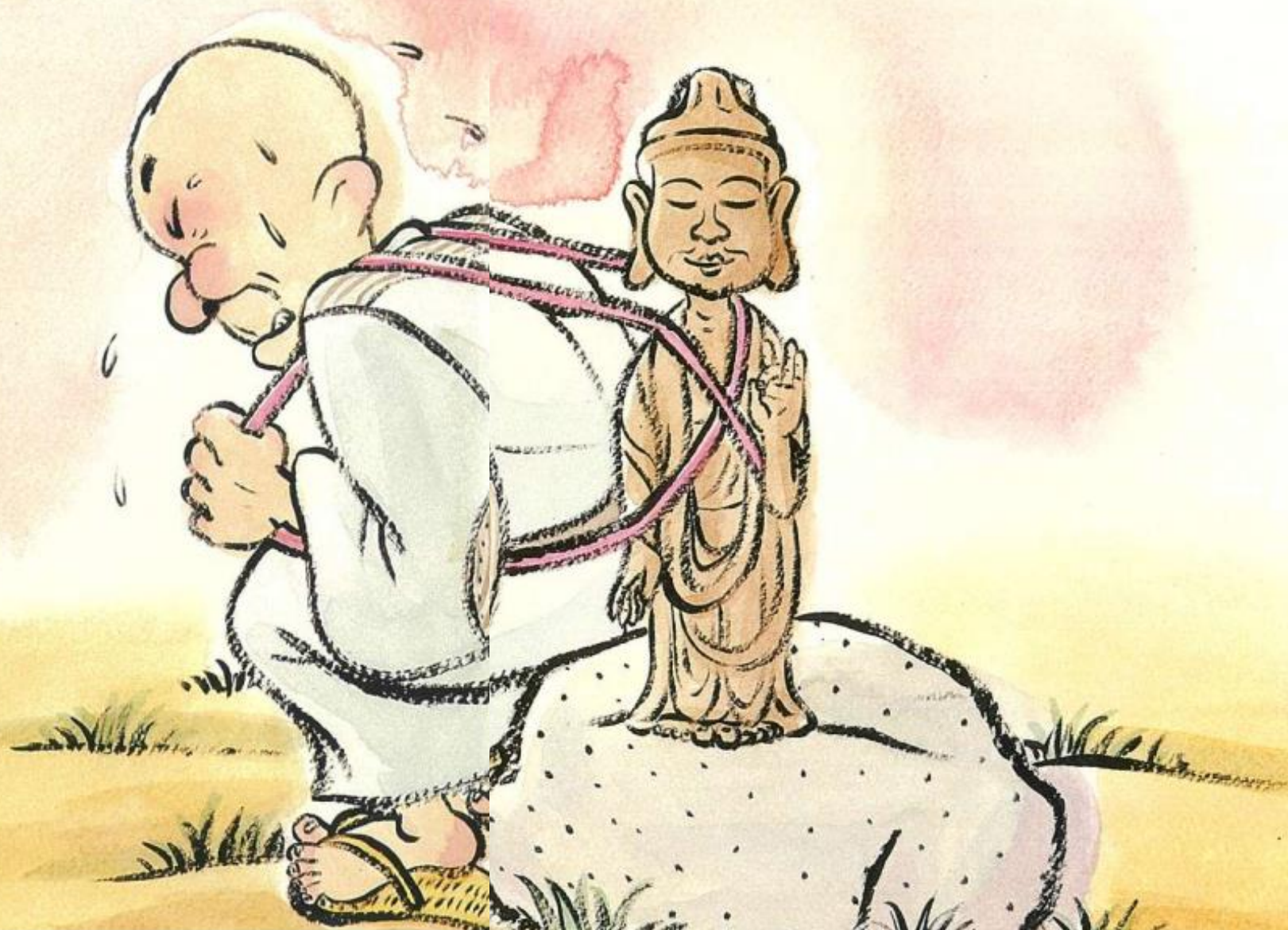


今から、四百年あまり前のお話です。
井崎村、小川原浦村には少しばかりの人家があり、人々は谷間にわ
き出る泉にたよって、飲み水や農業用水をまかなっておりまして。で
すから日照りが続くと、米が不作で、年貢を納めることができないと
きもありました。
これには、諫早のお殿様も困ってしまって、何か良い方法はないか
と、考えておりました。

ある日、「米を作るには水が必要だ。山手にある田原盆地に溜池を作れば、下流一帯は立派な水田になるであろう。」という名案が浮かびました。お殿様は、さっそく田原村に、溜池を作るように命じました。溜池作りのため、土地を離れることになった田原の人たちは、とても悲しみました。住み慣れた家や、土地を離れていく村人たちを、田原の西円寺の和尚さんも、とても気の毒に思いました。「これから引っこしていく新田原からでは、お寺参りをするにも不便なことじゃ。」と、皆んなと相談して、仏様も村人と一緒に、新田原へ移すことに決めました。



次の日、和尚さんは仏様を大切に背おって、新田原へと歩きだしました。ちょうどお日様が頭の上にくところ、農場の入り口あたりに着きました。「どれ、ここでひと休みしようかの、仏様もお疲れになったことじゃろ…。」と、汗をふきふきあたりを見回すと、腰をかけるのにちょうどいい、大石が目につきました。和尚さんは、「これは良かった。」と、その石に腰をおろして、「フーツ。」と、大きな息をつきました。



しばらく休んでから和尚さんは、「そろそろ出かけましょう…。。」と言って腰をあげようとすると、どうしたことが、仏様がきゆうに重たくなって、どうしても、石から離れません。和尚さんはふしきがり、押したり引いたりしてみました。が、仏様はびくともしません。

すっかり困ってしまった和尚さんは、いろいろ考えたあげく、もとの田原の方へ引き返してみようと、思いつきました。足を田原の方へ向けたとたん、きゆうに仏様が軽くなつて、やすやすと石から離れました。

「さて、『田原の地にとどまりたい。』と、仏様はお考えじやの。」和尚さんは、そうつぶやくと、もと来た道を西円寺へと、引き返して行きました。

そののち、人々はこの石のあったあたりを、
「へ仏石」と呼ぶようになりました。



神まち神なごり

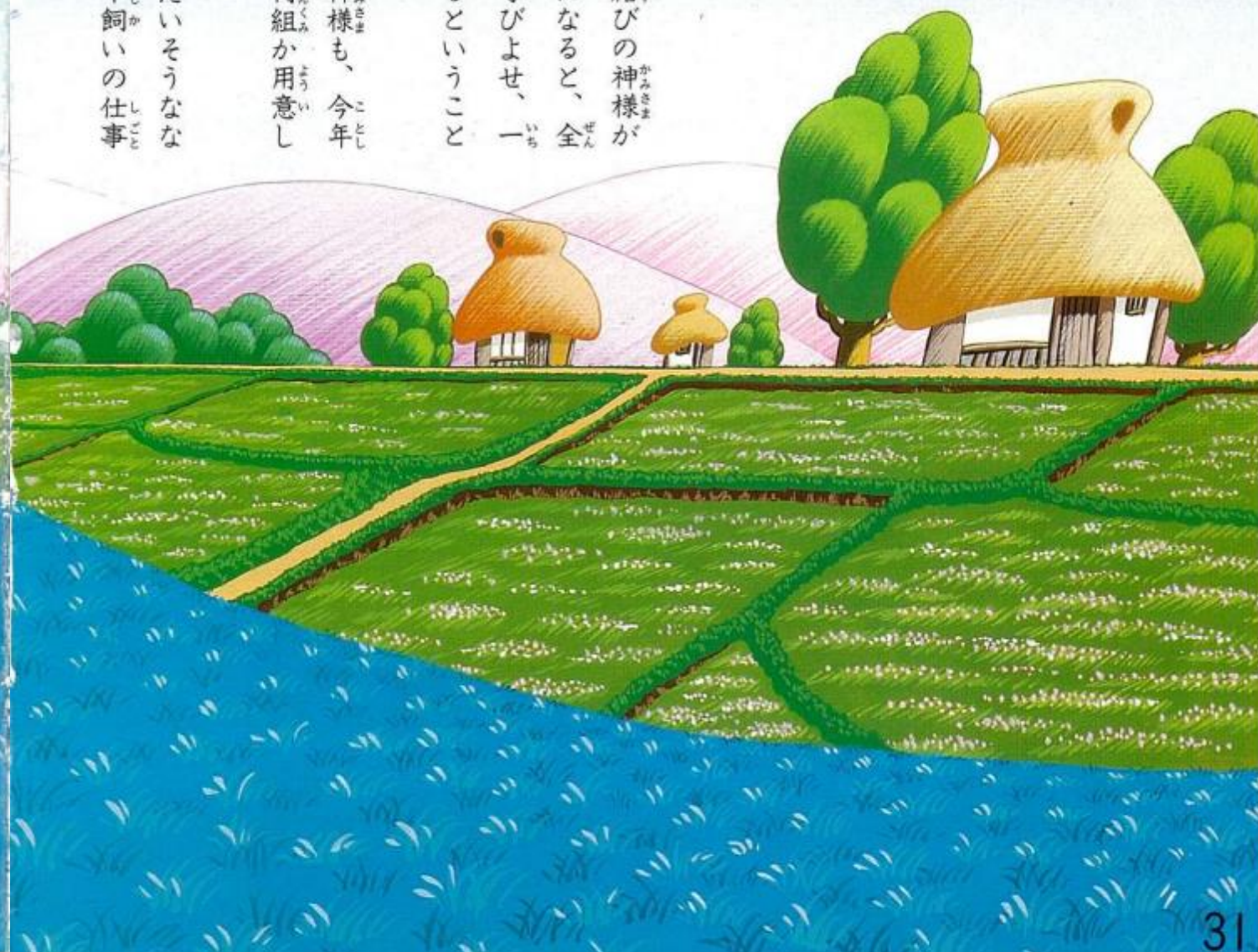
昔も今も、出雲の国には、縁結びの神様がいらつしやいます。毎年十一月になると、全国の神様たちを自分のところへ呼びよせ、一年間の縁結びについて相談されるということです。

ある年のこと、ここ小長井の神様も、今年誰と誰とを結婚させようかと何組か用意して出雲へ出かけられました。

その頃、この小長井の村に、たいそうななまけ者がおりました。畑仕事も牛飼いの仕事

もなにひとつしないで、家の近くでひなたぼっこばかりしておりました。そんな男を、村人たちは『なまけ者のヤタロウ』と呼び、たいそうきらっていました。

ある日のこと、ヤタロウはいつものように仕事もせず、裏の草原へ寝っころがって真っ青に澄きった広い空を、見上げておりました。



そのヤタロウが何を思ったのか、神社へ出かけて行き神様へ向かって、「おいも、もうよか年やつけん嫁さんのほしかあ。だいじやい、よか人のおらんやろか？ 神様みつけてくんさい。」とお願いをしました。

それを聞いた神様は、思わずこうつぶやきました。「こいつはとんでもないやつじや。毎日まいにち、なまけておるのに嫁さんがほしんだなんて……。ふとどきものめが：//でも、なんとかしてやらんなあ。しかし、こんななまけ者のところへきてくれる者は、だれひとり、おらんじやろなあ。困った、困った。」

ほんとうに困ってしまった神様は、あれこれ思案されたあげく、やっと一つのことを思いつけました。

その夜のこど、神様はヤタロウの夢枕に立ち、こう言いました。「ヤタロウ、おまえのようになまけ者のところには、誰も嫁にはこんぞ。もし、どうしても、と言うのならことしとれた米を神社へお供えするがよい。そうすれば、おまえの願いを、かなえてやらんでもないぞ。」

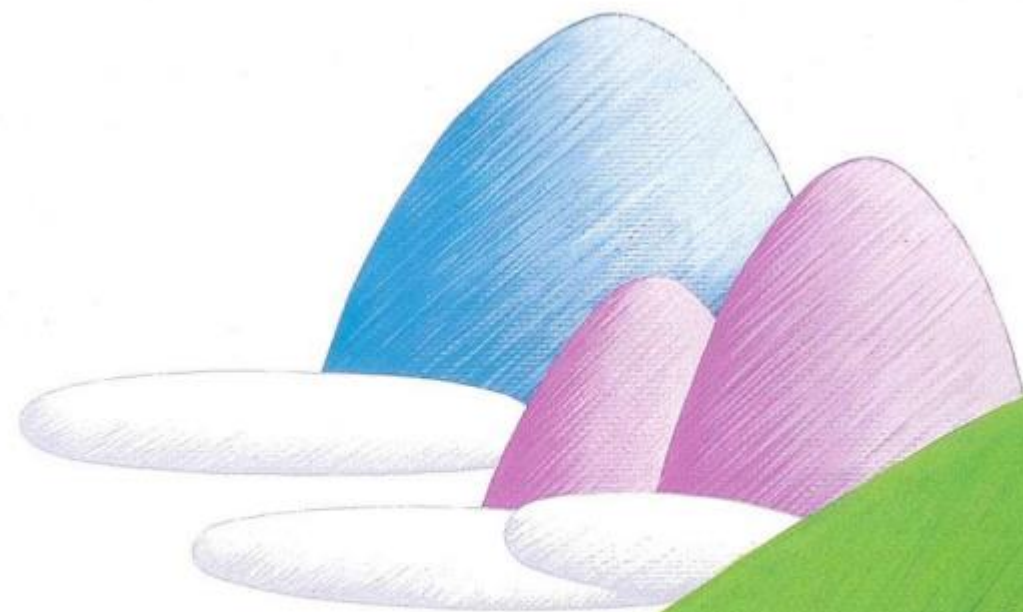
※1・よか年やつけんーいい年（通称）ですから
※2・みつけてくんさいーみつけておいて下さい
※3・こんぞーこないぞ

※4・やったつやろか↓だったのだろうか
 ※5・なんこつ↓なにこ
 ※6・降らんばよかいどん↓降らなければよいが

翌朝、目を覚めたヤタロウは、「ありや、夕べの夢は正夢やったつやろか？ たぶん神様のお告げじやろ。」と、大そうはりきって、くわを片手に田んぼへと出かけていきました。しかし、今までなまけていたので、ヤタロウの田んぼはひどく荒れ果てておりました。それでもヤタロウは一生懸命に田んぼを耕しました。

そんなヤタロウのようすを見て、村の人たちは口ぐちに、「あのなまけもんが、くわば持つて田んぼは耕しおる。めずらしき。」とおどろきました。なかには「なんこつやろかね、きゆうに、大雨の降らんばよかいどん。」とか「なんの、三日坊主たい。」と悪口を言う人もいました。

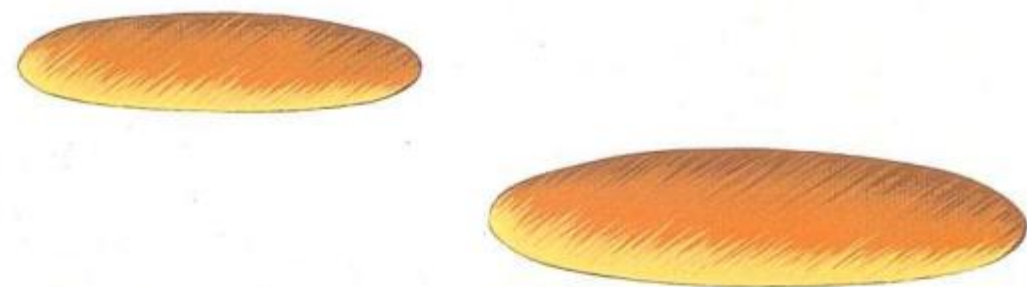
しかし、ヤタロウがあきもせず、毎日まいにち田んぼ作りに励むのを見て、村の人たちもだんだんヤタロウを見直すようになりました。



そうやって一生けん命働くヤタロウの姿を、かげから見つめて
 る者がおりました。
 名前を、おミネと言い、気だてのよい働き者でした。そのおミネ
 が、ヤタロウの姿を見て、好きになってしまったのです。

「なして、どうして
 はかいおったやろか、はかりたのだからか
 きばりんは、働かなければ」

ときどきおにぎりを分けてやったり、お茶や食べ物をもっていっ
 てやる者もありました。ヤタロウも村の人たちの親切が身にしてみた
 のか、「なして今までなまけてばかりおったとやろか、ようし、明日
 もきばらんば!!」と、なおいつそう精を出して米作りにはげみました。



※10・こがんことばしてくるっとはーこんなことをしてくるのは

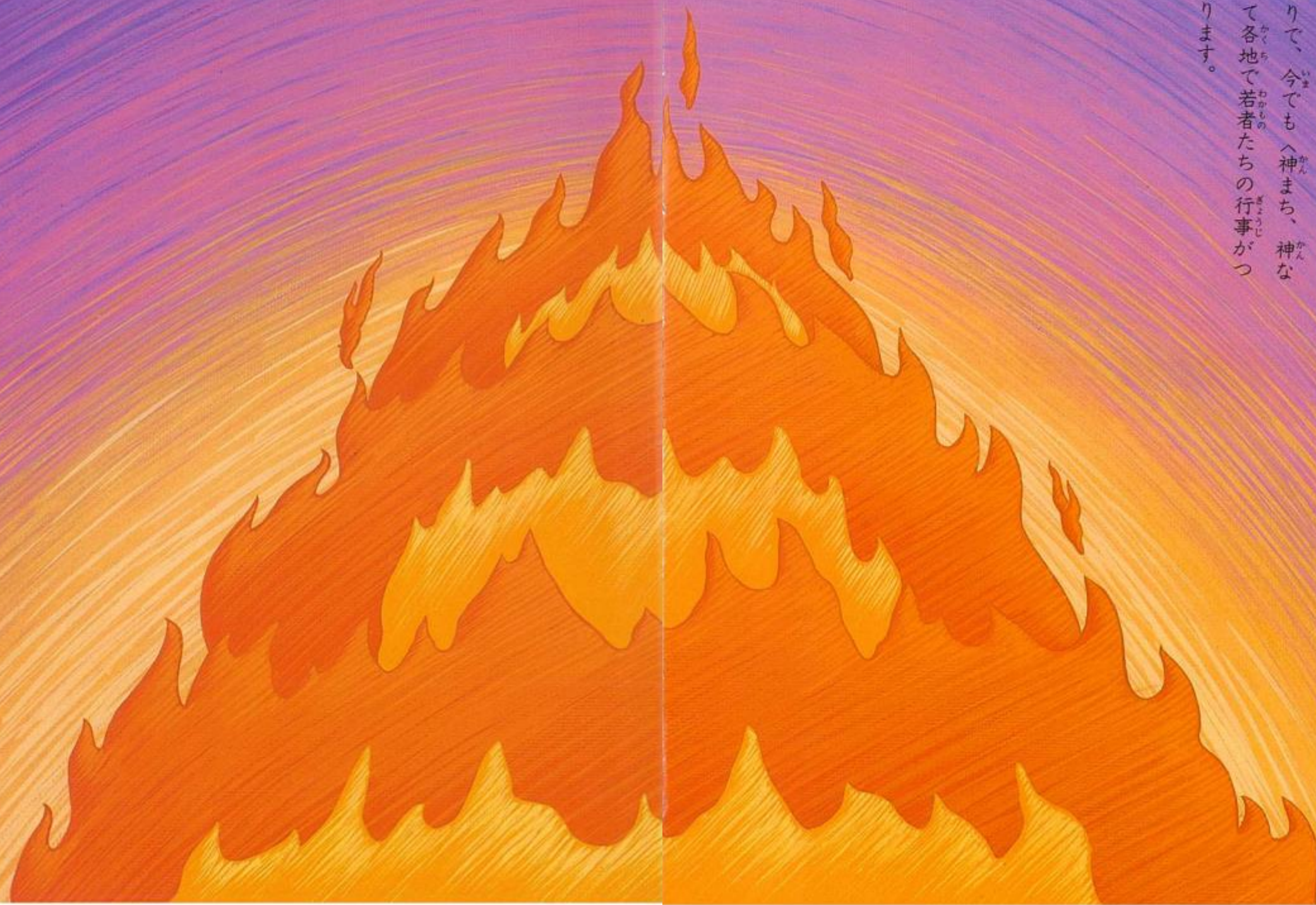
やがて秋になりました。みごとにヤタロウの作った稲が
実りました。ヤタロウは、さっそくお供えを神社へ持って
行き「神様、おいは、おミネさんを嫁さんに欲しか。どう
かよろしゅうたのみます。」と手を合わせました。それを聞
いた神様は大そう喜んで、またヤタロウの夢枕に立ち「お
前は村一番の働き者になったのう。さっそく出雲へ行き、
おミネとの縁結びをしてあげよう。」と言いました。それ
をきいたヤタロウは、天にもものぼるような気持ちになりまし
た。

それから、おミネは毎日こっそりと、おにぎりやお茶を
田んぼのそばの木の下に置いていくようになりました。
ヤタロウは「だいやろか、いつもこがんことばしてくる
っとは。」とふしぎに思い、ある日そつとあたりのようすを
うかがっておりました。すると、いつものように木の下に弁
当を置いて行くおミネの姿をみつけました。「ああ、この人
やったとか。ありがとう。」と心の中でお礼をいいました。



そして、村の若者たちと一緒に、その年の十月三十日に、出雲までの道明かりとして夜通し火をたいて、おまつりをしました。そして翌月の十一月二十九日に、また火をたいて出雲から神様がお帰りになるのを待ったのです。

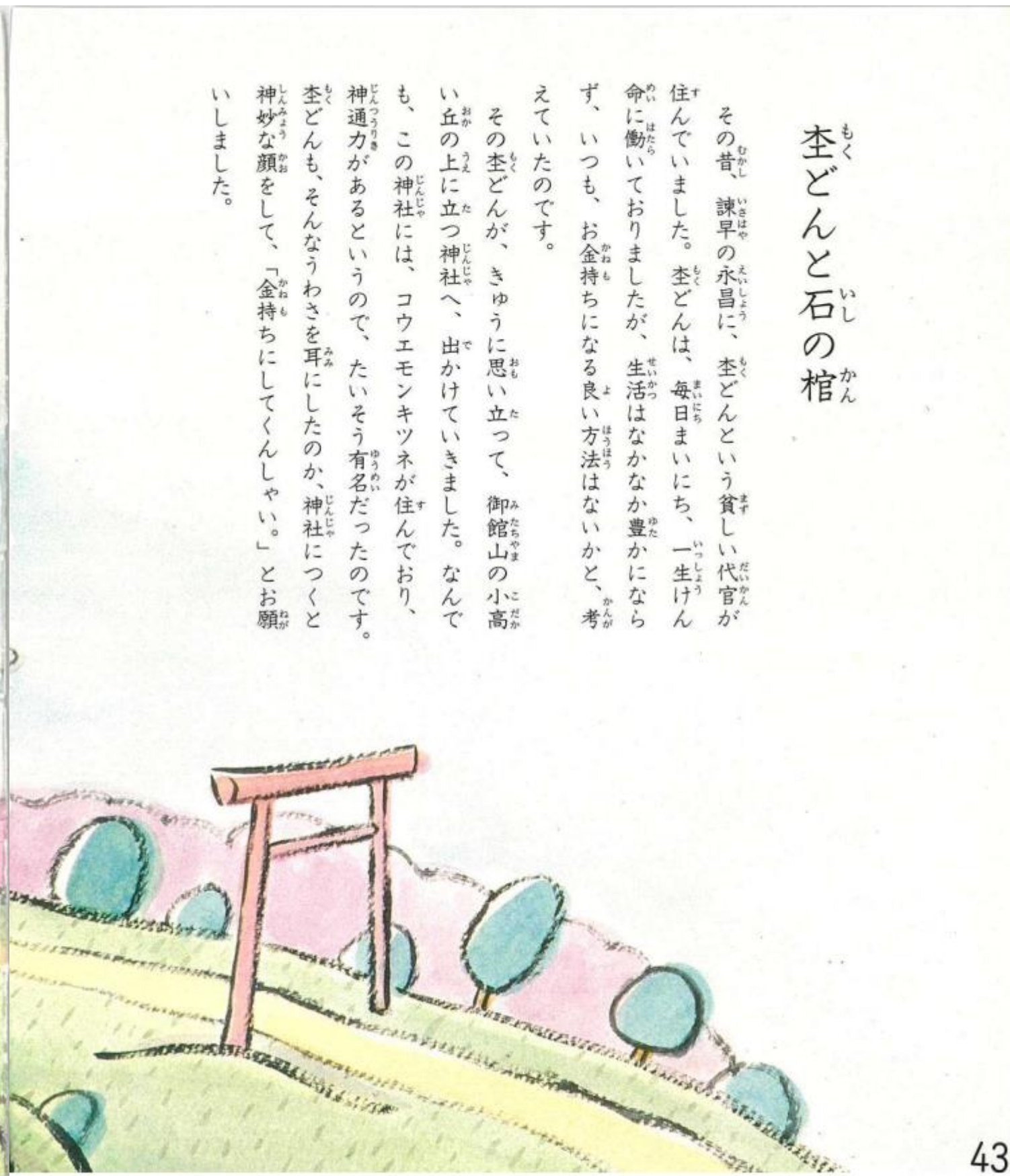
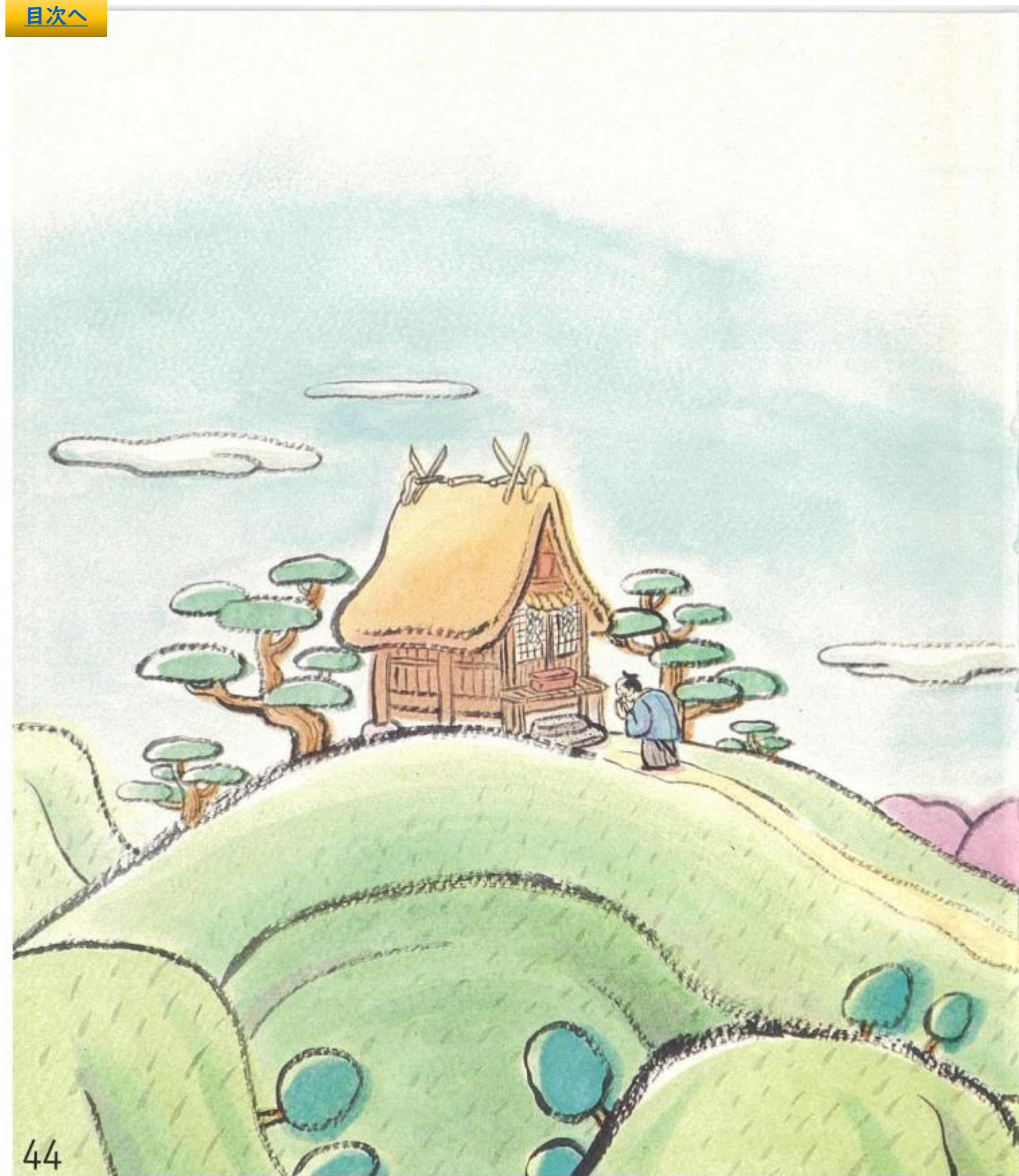
それが起こりで、今でもへ神まち、神なごり〜と言って各地で若者たちの行事がつけられております。



杵どんと石の棺

その昔、諫早の永昌に、杵どんという貧しい代官が住んでいました。杵どんは、毎日まいにち、一生懸命に働いておりましたが、生活はなかなか豊かにならず、いつも、お金持ちになる良い方法はないかと、考えていたのです。

その杵どんが、きゆうに思い立って、御館山の小高い丘の上に立つ神社へ、出かけていきました。なんでも、この神社には、コウエモンキツネが住んでおり、神通力があるというので、たいそう有名だったのです。杵どんも、そんなうわさを耳にしたのか、神社につくと神妙な顔をして、「金持ちにしてくんしゃい。」とお願いしました。

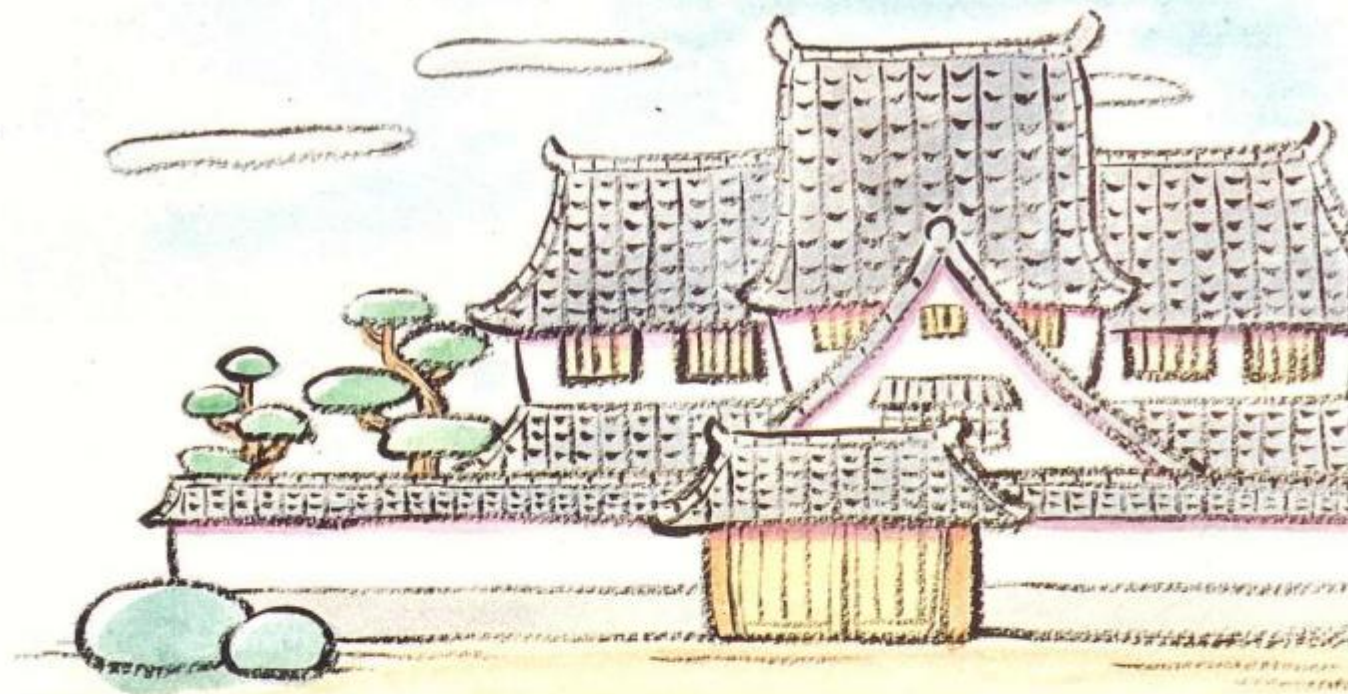
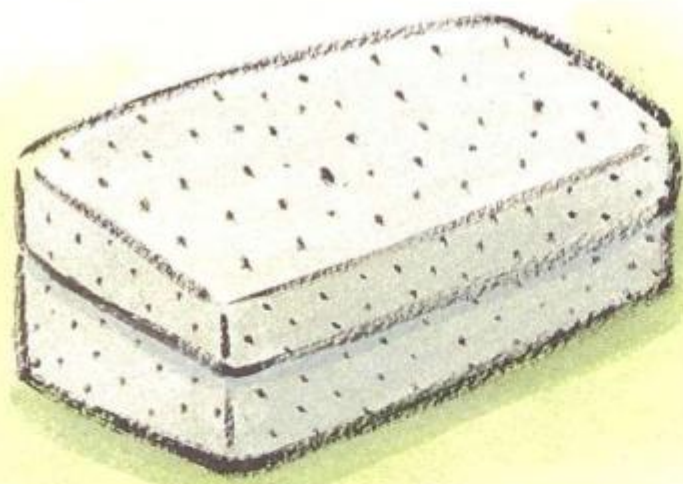


ふかぶかとおじきをして、ゆっくりと頭をあげると、目の前に一匹のキツネが立っていたのです。奎どんは、おどろきながらも今のうちにたのんでおこうと思い、あわててもう一度キツネに向かつて、お願いをしました。しばらく、じーっと男のようすをうかがっていたキツネは、「そうじゃのう、よし、おまえの望みを聞いてやってもよいぞ。ただし条件がある。わしが、おまえの望みをかなえてあげるかわりに、おまえが死んだら、その大きな肉体をおれにくれないか？ おまえから一度は、人間になってみたいと思っておったんじゃ。」

なにがなんでも、お金持ちになりたい奎どん、死んだら肉体などいるものかと、「はい、死んだら肉体はやりません。」と簡単に約束してしまいました。キツネは、その言葉を聞くと、「よし、きつとじゃぞ。」

といって、あつという間にいなくなりました。

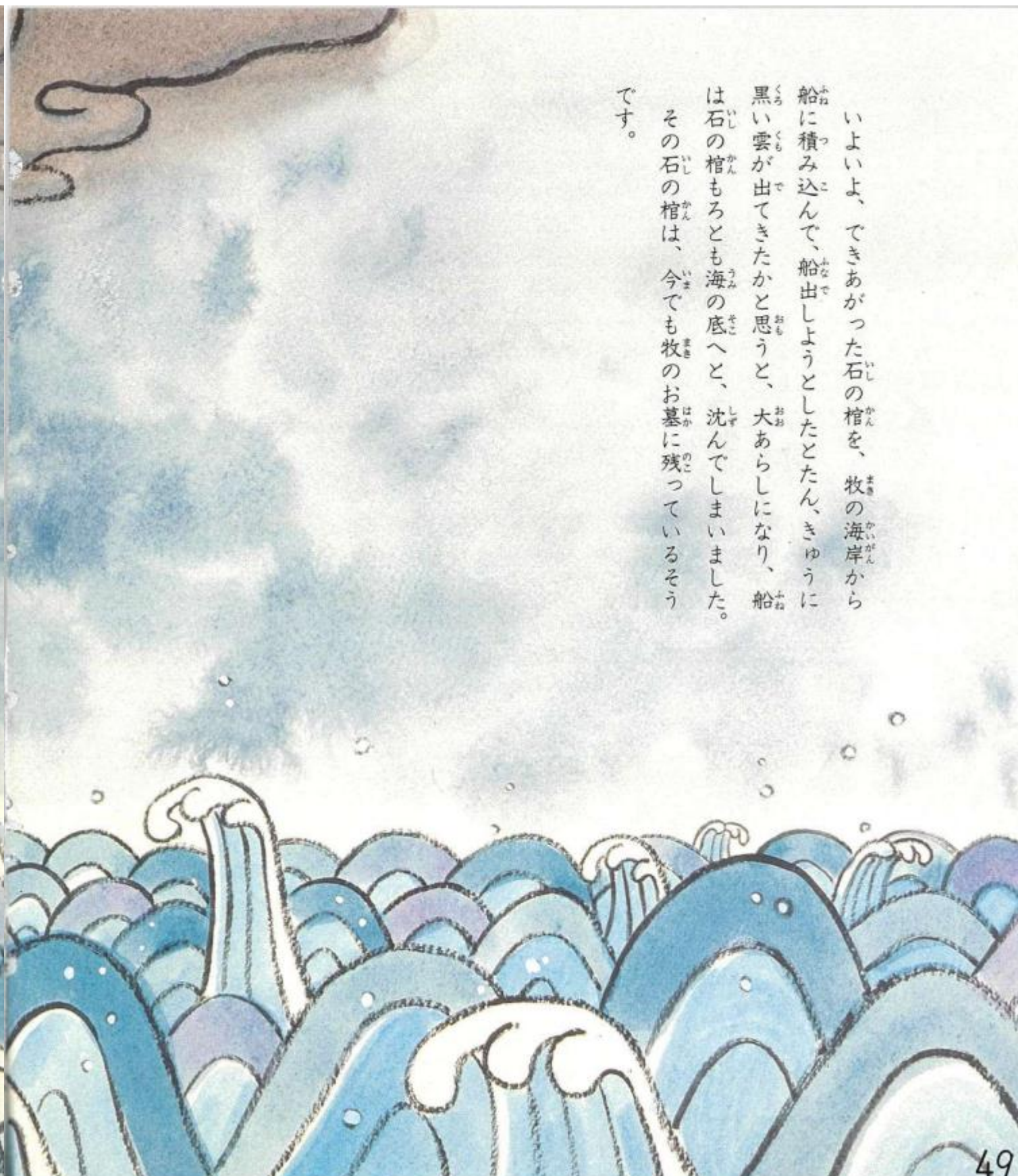




それから数年後、キツネがその約束を守ってくれたのか、とにかく奎どんのすることなすこと、みんな、うまくいき、お金はどうもたまる一方でした。貧乏だった奎どんは、みるみるうちに大金持ちとなりました。

ところが、いったん金持ちになつてしまうと、欲が出て、わがままになり、肉体をキツネにくれるのが、惜しくなりました。またまた何かよい方法は、ないかと考えたあげく、奎どんは、棺を石で作ることにしました。

今度は、牧の小深井港にやってきて、帆崎の石工に堅固な石の棺を作ってくれるように、たのみました。これなら、いくら神通力のあるキツネでも、棺の中から肉体をとり出すことはできないだろうと考えたからです。



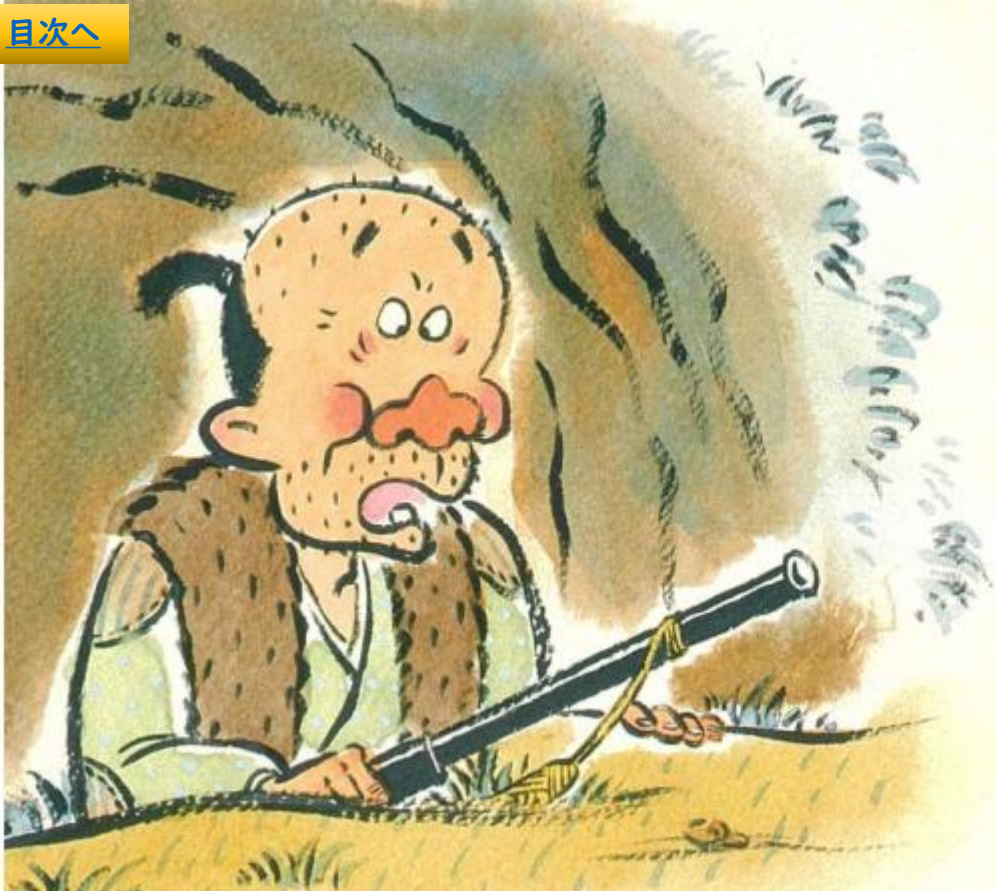
いよいよ、できあがった石の棺を、牧の海岸から
船に積み込んで、船出しようとしたとたん、きゆうに
黒い雲が出てきたかと思うと、大あらしになり、船
は石の棺もろとも海の底へと、沈んでしまいました。
その石の棺は、今でも牧のお墓に残っているそう
です。

重太夫と天狗

今から三百年程前のことです。

長里のずつと山奥に、重太夫という、鉄砲撃ちの名人が、おりました。もともと武士であつた重太夫は、その生活が大変いやになり、獵師となつたのでした。ちやうどその頃、重太夫は、九百九十九匹の猪を、撃ちとっていました。ある晩のこと、重太夫は千匹目の猪を撃とうと、猪待ち穴にはいつて、猪が来るのを今か今かと待つておりました。しかし、その日に限つて猪は出て来ません。さすがの重太夫も、いらいらしていました。





ちょうどその時です。一匹の大猪が通りかかり、目の前の大きなへビの首筋をくわえて、ブンブン振り回したり、地面に打ちつけたりして、グツタリとなったところを、おいしそうにムシヤムシヤと食べてしまったのです。

そんな彼の目の前に、一匹のミミズがするするとはい出して来たかと思うと、次にそばの茂みから、大きなカエルがびよんぴよんとび出して来て、ぱくりとミミズをくわえて、あつという間に呑み込んでしまったではありませんか。「いやいや、これはおもしろい。」と眺めていると、今度は向こうの岩かげから、大きなへビが鎌首を立てながら出てきて、そのカエルに跳びかかり、大きな口を開いてゴクツゴクツと、呑み込んでしまいました。と、

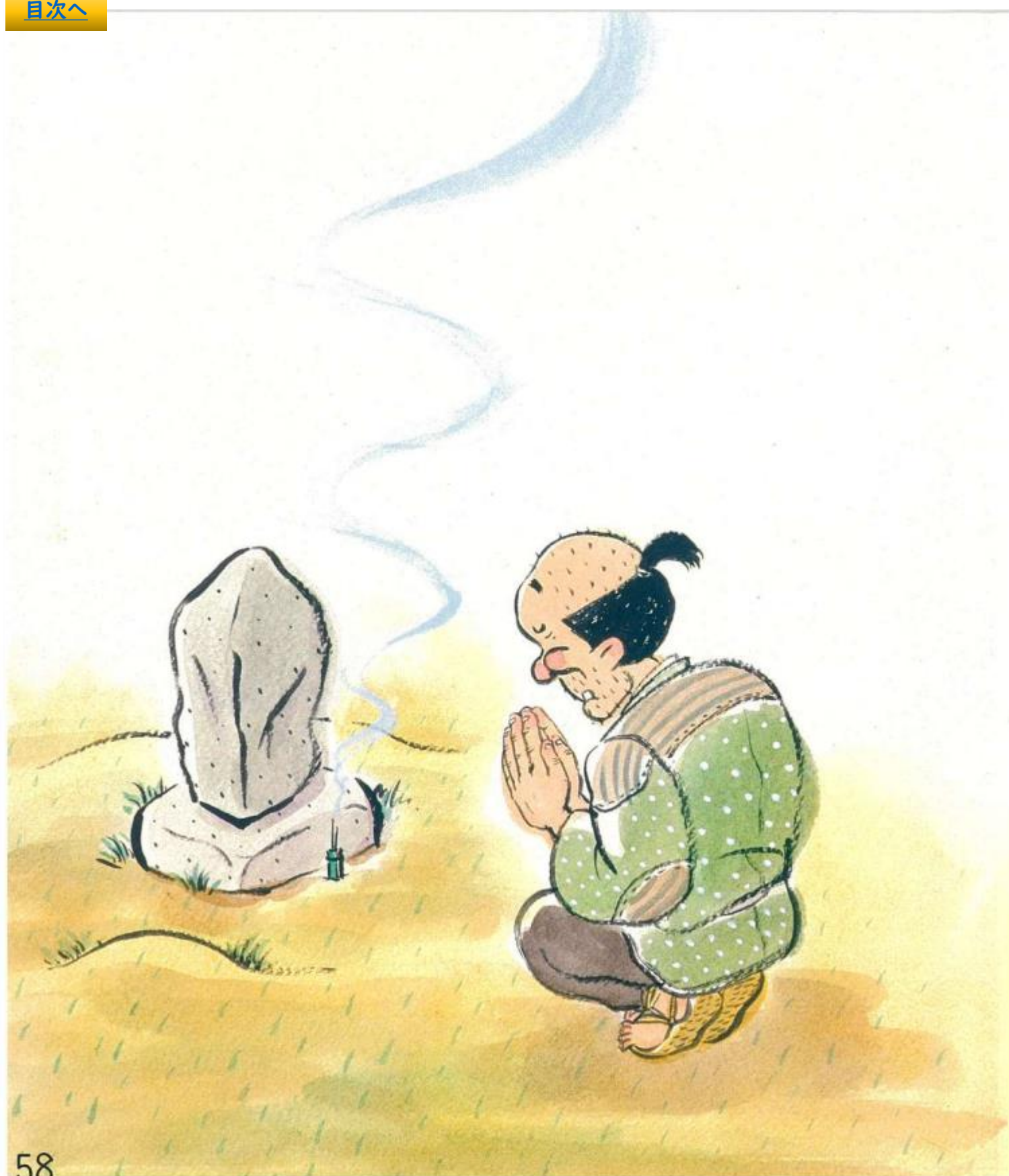


それまで、このようすをじつと見ていた重太夫は、ここぞとばかりに鉄砲をかまえてぶつ放そうとしましたが、「いや、まてよ。」と思いとどまりました。いくら武士をやめたとはいえ、頭の良い重太夫、「次に猪は撃ったおいは、あいは、誰に命を取らるつとやろか？ こいは、かんたんには撃たれん、たぶん、誰じやいろ、おいは試しよつとかもしれん。」と、かまえていた鉄砲をそつと置きました。

その時、重太夫の頭の上から、「カラカラ。」と笑う声が聞こえてきました。つづけて「さすがは重太夫だ。おそれいったぞ。」ときけぶのです。ずっと木の上で重太夫のようすを見ていたのは、多良岳に住む天狗でした。以前から「猪撃ち名人・重太夫」のうわさを聞き、なんとかしてひとあわふかせてやろうと考えていたのです。



しかし、重太夫もさるもの、みごとに天狗の思惑を見破ったので
す。その場にひとり、とり残された重太夫は、次々と起こったふし
ぎなできごとに、ただただぼうぜんとするだけでした。それからし
ばらくたちました。重太夫は、今まで猪を撃ってきたことを大そう
悔み、その霊をまつることにしました。今でも長里の中古場に猪の
霊をまつったその石碑が立っています。



小長井町年表(史跡等)

※小(小川原)浦(五(五里)津(津崎)新(新田原)郷(郷切)。↑(形武不詳)の森(小長井)

場所	西暦	時代	年号	平成元年 より前	おもな事
田 田 田	540	飛鳥(推古1599~)		1440	● 稲作人の戸籍を作る ● 17条憲法(604) ● 道徳院(小野妹子、607) ● 道徳院(607)
	645 708	奈良前期(白鳥) 奈良後期(天平)	大化 和銅1	1344 1281	● 道内に奥郡制(646、飯盛・小野) ● 80人、鎌を対馬、空戦、曼津に渡り、水城を築く ● 飯、阿蘇開造(和銅開造) ● 法王山和銅寺、行基菩薩開創(高来) ● 和銅年代太良島三若太権現行基菩薩開創 ● 古事記(712)、日本書紀(720) ● 平安時代(792~1184) ○ <u>山茶花に庵を(?)</u> ○ キンカン石(?) ● 川上神社創建(寛平年代889~) ○ 弘法良の明鏡石(?) ● 道徳院(834) ● 保元の乱(1156) ● 平家滅亡
	382	平安前期(弘仁)		1207	○ 山茶花に庵を(?) ○ キンカン石(?) ● 川上神社創建(寛平年代889~) ○ 弘法良の明鏡石(?) ● 道徳院(834) ● 保元の乱(1156) ● 平家滅亡
	898	平安後期(藤原)		1091	○ 山茶花に庵を(?) ○ キンカン石(?) ● 川上神社創建(寛平年代889~) ○ 弘法良の明鏡石(?) ● 道徳院(834) ● 保元の乱(1156) ● 平家滅亡
	1185	鎌倉	文治	884	○ 文治の頃、日原村を開拓 ○ 道徳院(寛政5初建、明治19正建)
	1316	鎌倉	正和5	673	○ 道徳院(寛政5初建、明治19正建)
	1334	古野(南北)	建武	655	○ 道徳院(寛政5初建、明治19正建)
	1381	古野(南北)	弘和	668	○ 道徳院(寛政5初建、明治19正建)
					● 1400年代・土一揆(1354・1428~)
	1390	室町(足利)	明應	599	● 高来、大村、藤津(有馬貴純、1473=文明4年) ● 応仁の乱(1467) ● 西郷高直、伊佐早高城(1474=文明6年) ● 有馬貴純、高来・藤津を領し、後村・高来へ(1541=天文10年) ○ 六地蔵(10、13) ○ 林崎間こん(室町時代) ○ 永禄半蔵、日原神社、 <u>仏教</u> 、一本松(旧坂大寺村)
田、井 田、新 田 通 田 田、新 通 長 小、井	1548	室町(足利)	天文17	444	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1558	室町(足利)	永禄	431	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
		室町(足利)	永禄		○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1570	室町(足利)	元龜1	419	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1575	龍山	天正3	414	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1580	龍山	天正8	408	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1582	龍山	天正10	406	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1583	龍山	天正11	405	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1584	龍山	天正12	404	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立
	1585	龍山	天正13	403	○ 日原城(永禄承)永禄1(1558)永禄12(1569) ● 蓮竹庵現成庵、金殿寺(?) ● キリスト教、金殿寺を焼く(1574、天正2) ○ 日原神社遷座(現在地) ○ 天正年間、井崎・小川原間の水争い ● 西郷高直、竜造寺隆信に降る、小江神社(1577、天正5) ○ 日原山、西門寺 ○ <u>日原山三寺村死(7.16)</u> ● 本鏡寺の立

小長井町の年表(史跡等)

推定年代	時代の区分	おもな事
今から 約10,000年前	先縄文時代	○ 山茶花・飯を(古野町) ● 最後の氷河期の終わりのころ(古野町・ナイフ型石器)
1,000	縄文時代 (早期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
5,000	(前期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
4,000	(中期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
3,000	(後期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
2,300	弥生時代 (前期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
2,100 A.D. 0	(中期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
1,900	(後期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
1,700	古墳時代 (前期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)
1,300	(中期)	● 弘法原(高来町) ○ 山茶花 ● 弘法原(高来町)

場所	西暦	時代	年号	平成元年 より前	おもな事
小 牧 遠	1789	江戸(徳川)	寛政	200	○天神、弘法さん(寛政年間)
遠	1792	江戸(徳川)	寛政4	197	○山の神さん ●温泉湯火噴火、眉山崩壊、大津波
遠	1793	江戸(徳川)	寛政5	196	○黒崎神社
田、遠	1801	江戸(徳川)	享和1	188	○馬頭観音
長	1810	江戸(徳川)	文化7	179	●本明川、大洪水
小、新	1814	江戸(徳川)	文化11	175	○観音 ○稲荷(釜、大明神、文化年間) ●諸国大旱ばつ
田、遠	1816	江戸(徳川)	文化13	173	○番塚 ●諸国戸口調査
小、新	1817	江戸(徳川)	文化14	172	○ごこくじょさん(稲荷、大田神外) ●諸国大旱ばつ
田	1818	江戸(徳川)	文政1	171	○井手稲荷(田神さん境内) ○天満宮(1830=文政13?)
田、遠	1827	江戸(徳川)	文政10	162	○山茶花の神(1864=元治1、文政10)
遠	1831	江戸(徳川)	天保2	158	○天満宮(観音さん境内) ○柳谷、弘法さん ●天保の飢饉始まる(1832~1836)
遠	1833	江戸(徳川)	天保4	156	○恵仁田、八天狗 ●大塩平八郎の乱(1837) ●謙早、黒崎崎
井	1839	江戸(徳川)	天保10	150	
牧	1840	江戸(徳川)	天保11	149	○ <u>祭切、八天宮、金平神社(丁、12)</u>
牧、小、遠	1851	江戸(徳川)	嘉永4	138	○堤の神(水神、湯附天、地神)
長	1852	江戸(徳川)	嘉永5	137	○牧瀬池 ○浄真寺焼失 ○釜、金比羅さん
小	1855	江戸(徳川)	安政2	134	○愛宕さん
小	1858	江戸(徳川)	安政5	131	○ <u>藤原神社(拝殿)</u>
小	1860	江戸(徳川)	安政5	129	○金比羅(安政7)
小	1862	江戸(徳川)	文久2	127	○田神 ○浄真寺再建
長	1868	現代	明治	121	○宇良・長里の山争い ●明治の初、黒崎橋(佐賀県令設立)
長	1871	現代	明治4	118	●規藩愛見
長	1872	現代	明治5	117	●学制発布 ●戸長制(庄屋制廃止) ●鉄道(新橋~横浜) ○明治6(長里小下等科、小川原浦小、井崎小下等科、田原小)
長	1874	現代	明治7	115	○大久保水道開通 ●西南の役(明治10) ●北高来郡(高来郡が南北に分かれる)
小	1878	現代	明治11	111	○崎原小学校
牧	1879	現代	明治12	110	○村の合併(遠竹村+井崎村に、田原村+小川原浦村に)
小	1881	現代	明治14	108	●異道(謙早~湯江)
小	1883	現代	明治16	106	○八天神社
小	1885	現代	明治18	104	○太子さん(明治中頃)
小	1886	現代	明治19	103	○長里新開
小	1888	現代	明治21	101	○藤原神社(正殿) ●県道(湯江~小長井)馬車
小	1889	現代	明治22	100	○小長井村(小川原浦村、長里村、井崎村)、町村制 ●大日本帝國憲法

場所	西暦	時代	年号	平成元年 より前	おもな事
小、田 遠、小	1590	桃山	天正18	339	●近世大名、佐幕藩(直茂)
遠	1592	桃山	文禄	337	●文禄の役、朝鮮出兵、朱印船制度 ●朝鮮より活字印刷
遠	1597	桃山	慶長2	332	○崇福院浄真寺 ●慶長の役 ○西村左京がつれてきた(高麗漆の墓)
長	1600	桃山	慶長5	329	○諏訪神社 ○浄真寺 ●関が原の戦い
長	1601	桃山	慶長6	328	●熊本城(6~12) ○阿弥陀如来(阿弥陀+崎?) ●糸坂の誓願寺 ○称念寺
田、遠	1615	江戸(徳川)	元和	374	●深澤神社(1612、慶長12)
長	1619	江戸(徳川)	元和5	370	●大坂夏の陣(1614)
長	1624	江戸(徳川)	寛永1	365	●大坂冬の陣、豊臣氏滅亡 ●竜造寺直孝、謙早姓となる。鍋島氏謙早領を没入地とする
田、遠	1637	江戸(徳川)	寛永14	352	●鍋島氏、謙早領より領地3,000石
長	1639	江戸(徳川)	寛永16	350	●日本全土大凶作(1635~1636)
長	1663	江戸(徳川)	寛文3	326	●鳥原の乱 ○西門寺新築移転 ○築切田(江戸初頃) ○謙早街道
長	1672	江戸(徳川)	寛文12	317	○ <u>猪の塚</u> ○大久保馬頭観音(寛文年間) ●長崎地方に天然痘流行(1662) ○市村島神社(寛文、延宝時代)
長	1692	江戸(徳川)	元禄5	297	○阿蘇神社(鳥居)
長、田	1699	江戸(徳川)	元禄12	290	○大久保潤二(元禄年間一) ○田原浦池(郡第一) ●元禄年間(1688~1703)
田、小	1700	江戸(徳川)	元禄13	289	●本明川大洪水(8/13、死者487) ○飯盛神社再建(権現さん、S、13) ○日島神社 ●赤穂浪士の仇討(元禄15年12月)
遠	1703	江戸(徳川)	元禄16	286	○恵仁田弁財天
井	1716	江戸(徳川)	享保	273	○享保年間(?)、淀橋神社、社殿(享保5拝殿、鳥居) ●吉宗、享保の改革(1716~1735)
長	1718	江戸(徳川)	享保3	271	●謙早の大火 ●諸国の戸口調査(1723)
小、井	1724	江戸(徳川)	享保9	265	○しじきさん ●儀約令
遠	1726	江戸(徳川)	享保11	263	○小川原浦、井崎の水契約書(1589=天正17、水契約書) ●諸国戸口調査
遠	1732	江戸(徳川)	享保17	257	●関西以西大飢饉 ●薩摩藩、甘露あり飢民なし
遠	1749	江戸(徳川)	寛延2	240	○佐賀藩、謙早領より4000石領地(遠竹村含む)
遠	1750	江戸(徳川)	寛延3	239	●謙早一揆 ●百姓の強訴禁止、諸国戸口調査
遠	1755	江戸(徳川)	宝暦5	234	○諏訪神社(権田神社)
遠	1762	江戸(徳川)	宝暦12	227	○八坂神社 ●ルソー「民約論」 ●本居宣長、平賀源内
遠	1767	江戸(徳川)	明和4	222	●佐賀藩、謙早領に領地4000石を返還
遠	1783	江戸(徳川)	天明3	206	●天明の大飢饉始まる



小長井町長

古賀 忠臣

「昔むかし、そのまた昔……。」誰れもが母の胸の中で聞いた昔話は、甘い想いと重なりながら、かげろうのように時空のあなたでゆらめいています。

あれは、母の口を借りた遠い祖先との対話だったのかも知れません。

昔話は、果て知らぬ過去から現在まで、その時々村人の心を乗せて口から口へ語り継がれ生き続けて来ました。昔話は、私たちの記憶をはるかな祖先たちの世界に呼び戻す美しいたぐり糸であり、祖先からのかけがえない贈り物であります。

しかし、小長井の野や山に、海や川に神様や鬼たちの姿を滅多に見掛けなくなり、家々から草屋根やいろりが消え去るにつれ、ふる里の昔話もそれらと運命を共にしつつあるのではないかという不安が積のつておりました。

そのような時、青年団女子部の皆さんが、昔話の花畑をたずね、夢のような絵を添えて現代に生き生きと甦えらせてくれたのがこの本です。

このままでは朽ちるはずであった大切な祖先の遺産を若者たちが守ってくれたことに、いい知れぬ喜びと安堵を感じ、かつ感謝したい気持ちでいっぱいです。

私たちが、愛着と誇りをもってふる里を振り返るとき、私たちが手を差し伸べるものこそ、この「小長井昔話」の絵本であろうと思います。



小長井町教育長

辻田 弘輔

こながい「昔ばなし」の発刊おめでとうございます。心からお喜びを申し上げます。今年は六十年に亘る激動の「昭和」の幕がとじ「平成」の時代の歩みが始まった意義深い年であります。この記念すべき年に郷土小長井の「昔ばなし」が、二十一世紀の中核となる郷土青年団によって編集されたということは心はずむ快挙であります。

私たちの祖先は原始の昔から小長井に住みついて長い歴史をつくり、つましい生活の中から子どもたちの成長と幸福を願って沢山の民話を生みだしてきました。それらは今も伝えられて多くの文学の母体ともなっています。そして幼児から大人に至るまで、人生の味の深さと自然に学ぶ昔ばなしや民話として盛んに読まれています。両親と子の絆を深め、殊に子どもたちの豊かな人間性を養う糧となっています。地域文化活動の活発化は、活力ある町づくりを支える大きな柱であります。昔ばなしや民話は、子供たちの育成のためにはなくてはならない魂の補給源です。子どもたちは本能的に自分を伸ばしてくれるものを求め続けているのです。この昔ばなしは、必ずや子供たちの心の世界を広げる栄養剤として生きるものと信じます。

喜びと感謝をこめて……



小長井町青年団副団長

本多 真紀

緑があふれ、あたたかい人たちの住む町。そんな小長井の町が大好きです。私たちの町には、放っておくと、忘れ去られてしまいう昔ばなしが、数多くあります。それも、時代の移りかわりと共に、語り承がれていくことが、だんだん少なくなっています。淋しいことですね。私は、この絵本を通して、お母さんから、子供たちへと、昔ばなしが語り承がれていくことを願っています。これから先、いつの時代になっても……。

また、今回の絵本製作にあたりましては、小長井町をはじめ、数多くの皆様に御協力をいただきました。本当に、ありがとうございました。

小長井町青年団女子部一同



私達の生まれた小長井町は、県界ではありますが前は干潟の有明海をいただいた雲仙岳、後ろは多良岳と、海の幸、山の幸に恵まれた大変住みやすい町です。その町も小長井村が誕生して百周年を迎えます。

時代が昭和から平成へと、新しい年を迎えたことと重ねて何かしら感慨深いと共に、ますます心新たに前進していきたいと思っています。

そこで青年団女子部では、その記念事業のひとつとして、古くから語り承がれてきた昔ばなしが、消えさらないうちに形として残していきたいと思い、絵本の作成に取り組みました。

私達女子部一同は、この絵本が小長井町に伝わる昔ばなしを、ひとりでも多くの方に知ってもらいたい、語り承いで下さることのでききとなればと願っています。このたびの製作にあたり、小長井町をはじめ文化協会、文化財保護審議会又町内外の皆様には多大なるご協力を頂きまして発刊に至ることが出来ました。厚く御礼申し上げます。



イラストレーター

川野 光弘

十八才で上京してから、早いものでもう十一年になります。東京での生活が長くなればなる程、私にとっての故郷「小長井」は、懐しく、美しく、温かく、かけがえのないものとして存在するようになりしました。

今回、青年団のみなさんから絵本づくりのお話をいただいた時も、それが、わが小長井町の百周年記念行事の一つであることを知り、少しでもお役に立てればと思い、お引き受け致しました。絵本の内容は、どれも素敵なお話ばかりで、楽しんで描かせていただきました。

微力ながら、この素晴らしい企画に参加できたことを誇りに思い、今は一人でも多くの方に絵本を読んでいただけるようお願いばかりです。

小長井音頭

作詞 島田陽子
作曲 島田陽子
編曲 島田陽子

一、多良の山なみ びようぶに立てて
海へ扇を ひらくまち
海は有明 不知火燃えて
ロマンあふれる よいところ
ほんなこて よかよか 小長井町は
沖の雲仙 見て暮らす

二、帆崎石の肌さえ ほのかに染めて
海に真つ赤な 陽がのぼる
香りゆかしい おがたまの木の
白い花にも 陽が映える
ほんなこて よかよか 小長井町は
ひとのこころも 春の色

三、あさり たいらぎ シャツカの味に
忘れられない むつころう
夏はきんしゃい カンテラゆれて
ピッシ取る浜 灯のまつり
ほんなこて よかよか 小長井町は
海の恵みが あふれてる

四、日本一なら 井崎の浮立
笛も見事な まつこみよ
目島くんちで にぎわう頃は
みかん娘も お年頃
ほんなこて よかよか 小長井町は
宝つたえて 花咲かす

五、眺めはるかな 山茶花高原で
描くみんなの 若い夢
牛が啼いてる 緑のまちは
寄せる笑顔で 伸びてゆく
ほんなこて よかよか 小長井町は
明日へひらいた 舞臺

六、たまたま 有明の海が見え
歩けば きらめく 海へ向かう
小長井は 坂のまち
石垣 美しい小径で
ひとは明るく 言葉をかわすよ
ああ ふるさと 小長井
このまちで生まれ このまちで生きる

坂のまち 夢のまち

作詞 島田陽子
作曲 島田陽子
編曲 島田陽子

一、たまたま 有明の海が見え
歩けば きらめく 海へ向かう
小長井は 坂のまち
石垣 美しい小径で
ひとは明るく 言葉をかわすよ
ああ ふるさと 小長井
このまちで生まれ このまちで生きる

二、高原に山茶花の紅ゆえて
おがたま 川辺に 白く咲くよ
小長井は 花のまち
みかんの 甘い香に つつまれ
ひとは優しく 心をかわす
ああ ふるさと 小長井
このまちを愛し このまちを歌う

三、太陽は 燃えながら 海を染め
不知火 あやしく 海を飾る
小長井は 夢のまち
みんなで 手をつなぎ 進めば
ひとは輝く あしたに会えるよ
ああ ふるさと 小長井
このまちを信じ このまちで燃える

四、たまたま 有明の海が見え
歩けば きらめく 海へ向かう
小長井は 坂のまち
石垣 美しい小径で
ひとは明るく 言葉をかわすよ
ああ ふるさと 小長井
このまちで生まれ このまちで生きる

五、眺めはるかな 山茶花高原で
描くみんなの 若い夢
牛が啼いてる 緑のまちは
寄せる笑顔で 伸びてゆく
ほんなこて よかよか 小長井町は
明日へひらいた 舞臺

こながい昔ばなし

1989年4月1日発行

発行者 小長井町青年団 〒859-01 長崎県北高来郡小長井町小川原三浦名836
小長井町教育委員会内 TEL0957-34-2201

企画・編集 小長井町青年団女子部

絵 川野光弘

印刷所 諫早印刷株式会社 〒854 長崎県諫早市福田町20-26 TEL0957-22-1350

※この作品は史書及び言い伝えに基づいております。

こながいの 昔ばなし

